



# 占い所



川崎ゆきお

「この占い師、本物だと思います」

妖怪博士付きの編集者が話している。

「お寺へ向かう参道に一軒だけあるんです。たったの一軒ですよ。他の参道では最近では占い所だらけと聞いているので、少なすぎるのです」

「占い師か。歳は？」

「まだ、中年です」

「婆さんじゃない」

「はい」

「占い方法は」

「洋式ですが、運命鑑定とか、その他、何でもありのようです」

「タロットもやるしカルタも花札もやるか」

「カルタはないと思います。竹の棒も振るとか」

「あれは何と言ったのかなあ。串のようなやつ」

「串カツならジャンボ焼きサイズです」

「じゃ、占いの百貨店なので一軒でいいのじゃないか」

「ですから、他の参道ではもっと多いのです」

「それで、本物だと」

「きっとよく当たるんです。結構評判になっています」

「他の占い所は、どうしてない」

「土産物屋が引退して、そこが占い所になったりしていたようですが、すぐに潰れるそうです」

「ほう」

「実際にはできては消え、できては消えているようです。勝負にならないんですよ。それほどよく当たるので、そこばかりが流行っているとか」

「妨害しているんじゃないか」

「え、当たるのをですか」

「いやいや、営業妨害のような」

「それはないでしょ」

「その占い師、土地の親玉の関係者で、その子分が嫌がらせをしているとか」

「そんな時代じゃないですよ」

「その参道、何処が仕切っておるのかね」

「参道商店組合でしょ」

「ほほう」

「事務所がありました」

「ううむ」

「流しの占い師も、この沿道にはテーブルを立てないと言います。勝負にならないのでしょうか」

「仕切っているのは組合だけとは限らん」

「じゃあ、何処が」

「妨害しているんだらう。新しくできた占い所に嫌がらせをするとか」

「そうではなく、この占い師が念を送って妨害しているのではありませんか」

「君は、そんなことを本気で思っているのかね」

「半分は」

「何か事情があるんだろ」

「それじゃオカルトになりません。その占い師、実は魔法も使えて、他の占い師を根付かせないようにとか」

「何か裏で営業妨害をやっているんだ」

「分かりました。もう一度調べてきます」

しばらくして、編集者がやってきた。

「妙な具合です先生」

「どうした」

「商店組合から聞いたのですが、あの参道、本当は占い所禁止なんだそうです」

「それなのに、ぽつんぽつんとできるのだろ」

「まあ、緩い規制なんですよ。空き家も多いですから」

「何だろう」

「実はこのお寺、占いの寺としても有名らしいんです。境内にも占い所があるとか」

「おみくじのようなものだろ」

「そうですが、結構値段が高いのです」

「ほう」

「それで、参道での占いを禁止にしたいようですが、商店組合が適当なので、緩いんだそうです」

「じゃ、一軒だけある占い師は何だ」

「お寺の縁者で、公認だそうです」

「うーん」

「占い所は山道を少し登ったところにあります。お寺は十倍ほど先です。だから、お寺まで辿り

着けない人向けだそうです」

「じゃ、寺の直営店か」

「そうじゃありませんが、この一軒だけ許されているとか」

「私の出番はなさそうだな」

「はい。その占い師と対談して欲しかったのですが」

「裏のある占い師ではのう」

了